

「経験」と「概念」のはざままで
——〈私〉をめぐる思索の展開——

大西克智（九州大学）

西洋近世は、言語の誕生とともに古い「私」をめぐる思索が、新たに展開され始めた時代である。①まず一六世紀末、西洋の精神史を通じて初めて、〈私〉が一つの問題——厳密な意味での自己規定を拒むもの——として現れる。②ところがその後、一七世紀に入ると、自己規定の不可能性——〈私〉が問題であるゆえんそのもの——が顕在化する機会ほぼ失われ、③〈私〉をめぐる思索は、《私》という概念をめぐる考察へと、すなわち規定不可能な〈私〉から、無数の「私」に通有する概念としての《私》へと、反転しながら引き継がれてゆくことになる。

本提題では、このような経緯のうち、モンテーニュが現出させた①の問題を拙著『『エッセー』読解入門—モンテーニュと西洋の精神史』（講談社学術文庫、2022年）にもとづき確認したうえで、②に要するほぼという留保に関して、デカルトによる「懐疑」と「コギト」を従来とは異なる観点から捉え直す（パスカル、ライプニッツ、ロックに関わる③は、簡単な事実確認にとどめる）。